

## 第34回神通研集会 2023年7月23日(日)

### 横浜市健康福祉センター

今年は4年振りに分科会形式の参集で神通研集会を開催出来ました。参加内訳は、ろう者54名・聴者92名で146名が集まりました。各分科会の様子は・・・



### 第1分科会 「入門ゼミナール」

非会員も参加できる第1分科会入門ゼミナールは「神通研って？ろうあ運動って？手話って何？」というテーマで行いました。午前中に神通研会長の深海篤行氏から神通研の活動の目的や「通研として社会をかえたい」という熱い思い、また、神聴連の木村好幸氏から生い立ちやろう協会設立から10年しかたっていないラオスの現状について伺いました。

午後は佐沢静枝氏をゲストに招き、「魅力的な手話から広がる世界」と題して講演をいただきました。アメリカの研修旅行でカルチャーショックを受け、丸山浩路さんや米内山明宏さんから手話を学び日本手話の魅力に目覚めたのだとか。松尾芭蕉の俳句や宮沢賢治の作品を体全体で表現され、参加者はその表現力の豊かさに引き込まれました。つい先日韓国で行われた世界ろう者会議での国際手話に苦労されたそうで、佐沢さんの手話への探求はこれからも続きそうです。改めて手話の奥深さを感じ、分科会の幕を閉じました。



### 第2分科会 「制度」

最初に参加者全員に自己紹介をしていただきながら、手話通訳制度の現状や課題についてお話しいただきました。午前中は、主にコロナ禍で発生した各地域の課題などを振り返りました。参集できなくなったことで孤立してしまった高齢者のことや手話通訳者の身分や制度の脆弱さを再認識することとなりました。午後は、助言者の河原さんに最近の新しい法律や条例について説明をいただき、それに対する質疑応答、そのあと改めて討議・・・の予定でしたが、質疑応答の中で、聴覚障害高齢者の暮らしに関する内容がたくさん出され、多くの時間を使いました。施設などでの合理的配慮がない状況は差別解消法でどう扱われるのか？手話ができるヘルパーの情報をニーズにどのようにつなげたらよいのか・・・など。通訳制度については、「通訳者不足」という各地域共通の大きな課題を改めて感じる分科会となりました。



### 第3分科会「災害について考える」

午前中は、まず助言者の内田さんが、2013年にスタートした本分科会の経過について説明したあと、神奈川県防災関連部署職員5名の方々から「神奈川県における災害対策～避難や備えについて～」をテーマにお話しいただきました。どれも重要な内容でしたが、特に県土整備局住宅計画課が作成した「かながわ仮住まいリーフレット」についてのご紹介が興味深かったです。

今回県職員の方々から計4本の講義をしていただきましたが、情報量が多く進行も早かったため、質疑応答の時間も足りず、参加の皆さんの理解を十分深めることが出来なかったことは反省です。午後は、川崎、盲ろう者、横浜、県域から1人ずつ、各協会の防災に関わる取組みの報告や、それぞれの立場からの災害体験、防災に関して感じることをお話しいただきました。いつ起こるか分からない自然災害。この分科会は「自分の命は自分で守る」を合言葉に今後も継続します。今年度はお話を聞くことがメインとなりましたが、

来年度は参加者同士の経験交流、意見交換が出来るよう工夫したいです。（司会担当：竹内）



### 第4分科会「デフリンピック」

午前は、全日本ろうあ連盟事務局長 久松三二氏を迎えて、2025 デフリンピック東京で「誰一人取り残さない世界」そしてインクルーシブな社会の実現を！と題して講演していただきました。大会本番までのスケジュールや現在の準備状況などがわかりました。

これからデフリンピック運営委員会が取り組むことなど様々あることを知りました。

午後からは、「デフスポーツ・サポーター」について井上良貞氏から説明がありました。取り組みの目的として、デフリンピックだけではなくすべてのデフスポーツを応援していくという趣旨でした。途中、久松氏をまじえお二人の掛け合いがとても楽しく参加者からも好評でした。

